

平泉の世界遺産及びその考古学の現状

劉 海 宇[※] アンデス カールキビスト^{※※}

はじめに

2011年6月に「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学遺跡群」は、第35回世界遺産委員会によって評価基準のii（交流）とvi（関連）が適応され、世界遺産一覧表に記載することが決定された。登録資産は中尊寺・毛越寺・観自在王院・無量光院・金鷄山の5遺産から構成される。当初、柳之御所遺跡を含む6遺産で推薦されたが、柳之御所遺跡が仏国土（浄土）を表現した庭園と直接関係しないとしてイコモスに除外されたことが残念である。現在、文化庁及び岩手県の関係機関が、柳之御所を中心とする関連遺産も世界遺産拡張登録を目指して発掘調査及びほか各種事業を推進している。以下、平泉世界遺産の構成資産と拡張登録を目指す柳之御所を中心に、それぞれの概要及びその考古学の現状について述べてみたい。

1. 中尊寺

中尊寺は、12世紀前葉に奥州藤原氏初代清衡によって建立された平泉の最初の寺院であり、平泉中心部北寄りの関山丘陵に位置する。『吾妻鏡』によれば、12世紀後葉には中尊寺は40余りの堂宇と300余りの禅房の規模を誇ったという。現在は、金色堂（国宝）・金色堂覆堂（重要文化財）・経蔵（重要文化財）・大池伽藍（特別史跡）などの建造物と園池跡遺構等からなっており、顕著な普遍的価値を有している。

金色堂は、単層方形造の屋根をもつ一辺5.48mの方形木造建築で、屋根板を除く四壁及び上下の部材すべてに金箔が押されており、皆金色の仏国土（浄土）を象徴する阿弥陀堂である。棟木の墨書銘によれば、1124年に創建されており、室内には螺鈿・蒔絵などの技法を用いた3つの須弥壇があり、その内部に藤原氏3代の遺体及び4代の首級の入った棺が安置されたため、霊廟としての性格をもつ。それぞれの壇上には、西方極楽浄土の仏像群として阿弥陀三尊像・2体の天王立像・6体の地藏菩薩立像が安置されている。金色堂覆堂は、金色堂の保護のために1288年に造営された木造の覆堂であり、現存するそれは15世紀に再建されたものと推測されており、中尊寺北西の一面に移設されている。

経蔵は、1122年に造営された2階建ての木造建築で、一辺7.72mの規模をもち、紺紙金銀字交

※ 岩手大学平泉文化研究センター

※※ 岩手大学教育推進機構グローバル教育センター

書一切経・宋版一切経などが収められていた。内部の3面の壁に仏典を納めるための7段の経棚が設置されている（岩手県教育委員会 2013）。

大池跡は、中尊寺境内の北西の一面に位置しており、ほぼ楕円形を呈している。昭和38・39年に平泉遺跡調査会によって発掘されたが、平成10年から平泉町教委委員会が発掘調査を担当している。これまでの発掘調査の成果によれば、12世紀中に2時期に分けて造り替えた池が存在しており、I期の池は初代清衡によって造られたもので、南北長径約120m、東西短径約70m、平泉の最初の浄土庭園とされる。II期の池は南北約90m、東西約70mとなり、12世紀後葉に改造されたと分かる（図1）。ただし、発掘で検出された遺構の状況は『中尊寺供養願文』の記載内容と一致しないことが大きな課題である（島原 2018）。



図1 中尊寺大池伽藍配置復元図（藤島 1995 の 68 頁図の一部）

2. 毛越寺

毛越寺は、平泉中心部の南西側に位置しており、12世紀中葉に奥州藤原氏二代基衡によって造営された寺院である。『吾妻鏡』によれば、12世紀後葉には二代基衡が造営した円隆寺と三代秀衡が造営した嘉祥寺を含む40余りの堂宇と500余りの禅房の規模に達したという。白河院による京都の法勝寺をモデルにして造営された可能性が高いとされている。現在の毛越寺には、円隆寺と嘉祥寺の伽藍建築跡のほかに「大泉が池」と呼ばれる園池（特別名勝）と18世紀に再建された常行堂が存在する。

1980～1990年に大泉が池の発掘調査が行われた。その成果によれば、池は東西約190m、南北約60m、造園意匠に洲浜・出島・立石・築山など多様な手法が用いられたことが明らかにされている。中島は南大門と円隆寺金堂との中軸線に位置し、その両側に11間の反橋と7間の平橋が架けられている。池の護岸は基本的に玉石敷きの洲浜で構成されるが、南東岸には荒磯を表現した出島、南西岸には荒々しい岩を積み立てて造成した高さ4mの築山が設けられている。池内の

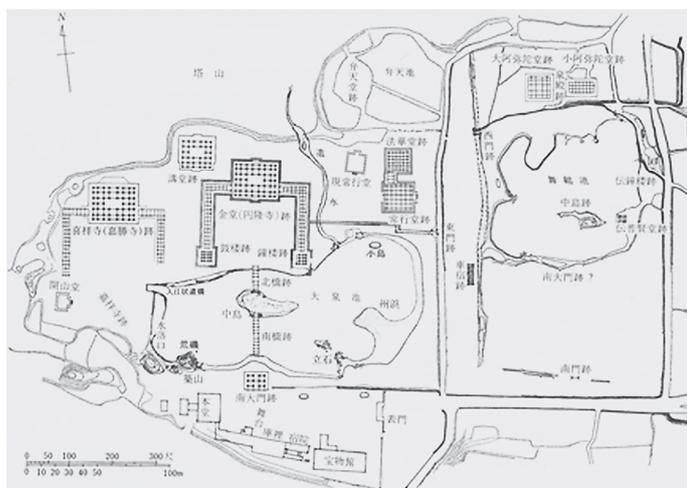


図2 毛越寺・観自在王院跡全域配置図（藤島 1995 の 117 頁図より加筆）

南東に高さ 2.5m の立石を中心に石組が施され、また北東に東西約 9m、南北約 4m の規模の小島が判明したことによって、池中に大小 3 つの島をもつことになる。池の東北に長さ約 80m、幅約 1.5m の遣水遺構も検出されている。円隆寺金堂の両脇に翼廊によって鐘楼と鼓楼とを連結しており、このコ字形の建築と南にある池の配置は典型的な寝殿造の様式の庭園といえる（図 2）。大泉が池の平面形は亀のような形に見え、『作庭記』の「池は亀又は鶴の姿に掘るのがよい」との記述によって造成されている可能性がある。また、池の護岸の洲浜・荒磯と北東部の遣水などの造園意匠も『作庭記』の記述と近似している（八重樫 2007）。

平成 23・24 年に、東日本大震災の最大余震で被災して 7 度傾いた立石を修復するための調査が行われており、その内部構造を判明したと同時に、元の位置に戻している。復元で補充した基礎石には、グラインダーで十文字の刻みを付けて後世で判別できるようにした（島原 2018）。

3. 観自在王院

2 代基衡の妻によって建立されたとされる観自在王院は幅 30m の通路を隔てて西側の毛越寺と向かい合っている。発掘調査の結果、舞鶴が池と呼ばれる池を中心に、北岸に大阿弥陀堂と小阿弥陀堂などの建築が配置され、池中に東西約 30m、南北約 12m の中島が設けられている。舞鶴が池は南北と東西ともにほぼ 100m の規模をもち、平面形が『作庭記』に記される鶴の形を呈する（図 2）。池の造園意匠は毛越寺大泉ヶ池のそれと比較すると、簡素であり、西岸の荒磯・石組の滝口と西北端にある洲浜の出島など『作庭記』によるものが多いとされている。

藤島玄治郎氏は、大小阿弥陀堂中間地区に住宅遺跡が発見されたことにより、観自在王院の前身が基衡の居館であったと指摘した（藤島 1995）。この庭園配置を概観すれば、大小阿弥陀堂等の建築が池の北側にある寝殿造様式の庭園であるため、この説は有力である。本中真氏も観自在王院の阿弥陀堂が池の西側にない理由を基衡妻の住宅庭園そのまま継承したことに起因するとしている（本中 1994）。

4. 無量光院

金鷄山を背景とした無量光院は 3 代秀衡が 12 世紀後半に造営した寺院であり、宇治の平等院の伽藍配置をまねて建てられたとされている。金鷄山はその西方にあり、秀衡の居館とされる伽羅御所跡と柳之御所跡はその東方に位置している。発掘調査の成果によれば、境内は南北約 320m、東西約 230m の規模をもち、西・北・東に土塁がめぐる。梵字が池は南北約 160m、東西約 150m の規模をもつ大きなもので、約 30cm の水深である。池中に大小 3 つの島があり、西側の大きな島に



図 3 無量光院跡（藤島 2018 より）

左右対称する翼楼をもつ阿弥陀堂が東面して建ち、その東側の島に楽屋・拝所とされる礎石建物 3 棟の遺構も検出された (図 3. 島原 2018)。

また、阿弥陀堂が建つ島の北側にそれと橋で結ばれていた小さな島が設けられたことも判明した。中島に建てられた伽藍群は西の約 600m の金鷄山と中軸線をそろえており、菅野成寛氏の実地観測によると、4 月と 8 月に金鷄山の山頂付近に日が沈むという (菅野 1991)。このように金鷄山は無量光院の浄土世界を形成することにおいて重要な要素であることが実証されている。

5. 金鷄山

金鷄山は、平泉中心部の西側丘陵に位置しており、標高 98.6m、麓との比高約 60m、平泉都市計画の基準として利用され、平泉にとって最も重要な山である。その山頂に経塚が造営されており、1930 年にはその経塚から 12 世紀の銅製経筒と陶器壺などの遺物が出土した。金鷄山の南に毛越寺及び観自在王院が位置しており、東の方向に无量光院の園池と柳之御所遺跡が位置する。

12 世紀を中心とした経塚の造営は、「末法思想」を基盤とした阿弥陀浄土信仰によって、写経した經典ほかを山腹や丘陵上の勝地に埋納して供養する一連の仏教信仰的営為で、九州地域から北海道にまで広範に波及した列島の規模での現象であることが近年新たに判明された。金鷄山経塚の状況を判明するため、今後の考古学的調査が俟たれる。

6. 柳之御所

北上川の西岸の段丘上に位置する柳之御所遺跡の発掘調査は、1988 年から開始されて現在まで継続されている。発掘の成果として、2 条の大規模な堀、何回か建て替えられた官衙の性格をもつ四面底建物跡及びほか数多くの建物跡、2 期に分けて存在した園池跡、文字資料を含むかわらけ・折敷・中国産陶磁器など大量の遺物、等々が見つかり、平泉研究に画期的な考古学資料をもたらした (図 4)。これらの遺構や遺物の性格・数量から見て、堀によって区画された内部エリアは、『吾妻鏡』にみえる「平泉館」の可能性が高いと指摘されてきた (櫻井 2018)。

これまでの発掘の成果によれば、堀内部は行政的な機能を持ち、しかも奥州藤原氏治世の 100 年にわたって保持されたことがわかる。その性格を示唆した遺物の中で文字や絵画資料が最も注目できる。折敷に書かれた墨書「人々給絹日記」、「馬」日記

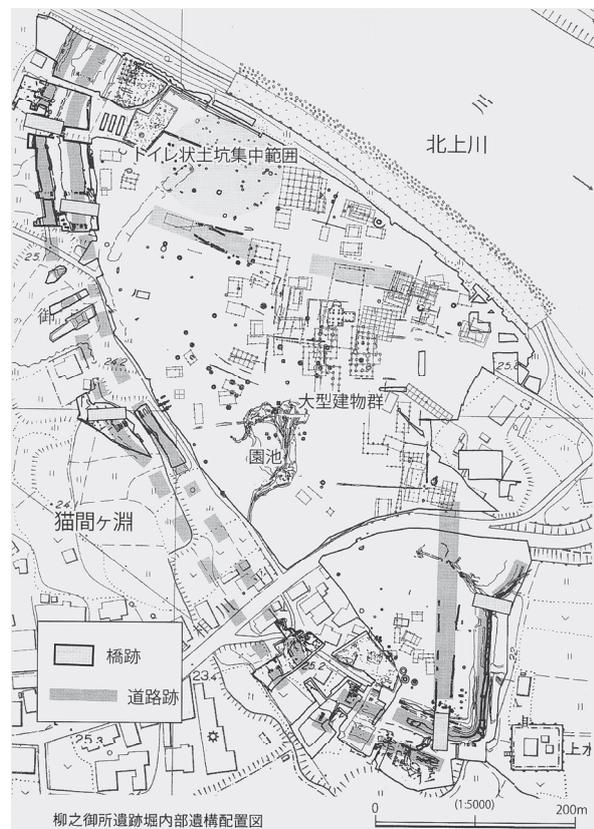


図 4 柳之御所遺跡図 (櫻井 2018 より)

の文字を記載する巻物の題籤軸、「磐前村印」の行政銅印などの文字資料及び折敷残材に描かれた擬人化蛙の板絵は、遺跡の地方政庁としての行政機能と饗宴儀礼機能を示したと考えられている。かわらけなどの土器の編年に参考し、遺跡はおおよそ12世紀前半・中葉・後半の三時期に分けられるが、各時期における施設の配置や遺構の変遷を明らかにするのが今後の課題となるだろう。

平泉遺跡群では、中国産陶磁器が数多く出土しており、なかでも柳之御所遺跡の出土数が最も多く全体の6割以上に達する。これまでも中国産陶磁器の平泉での流通は、12世紀前葉に始まり、その後半の3代秀衡・4代泰衡期には広く行われたと考えられてきた。柳之御所遺跡出土の型押し「吉」字耳部は、福州宦溪窯から数多く検出された白磁壺・水注の「吉」字耳部と酷似することから、宦溪窯産の可能性が極めて高いとわかる（劉2019）。流通のルートについては、まず福州に集積し、その後市舶司のある寧波を経由して博多に、または福州から台湾・琉球を経て博多に、最後に平泉まで運ばれたとするいくつかのルートが指摘されている（森2015）。柳之御所出土陶磁器の器種では白磁壺類が多い理由については、白磁四耳壺は高級感があり、権威の象徴であると指摘されてきた。しかし頸部と底部に布着せの黒漆塗の痕跡が残るそれが存在ことから勘案すると、密閉するために黒漆塗を施したコンテナ陶磁器の可能性が否定できない（劉2018）。

おわりに

以上のように、平泉世界遺産の構成資産と拡張登録を目指す柳之御所について、その概要及び考古学発掘調査の成果を述べた。そのなか、平泉の園池遺構は、中尊寺の大池・毛越寺の大泉が池・観自在王院の舞鶴が池・無量光院の梵字が池を代表として、数多く存在する。現在は、考古学的遺跡の修復の理念と手法に基づき、毛越寺の大泉ヶ池及び観自在王院の舞鶴が池における復元整備がすでに完了しているが、中尊寺大池及び無量光院跡の発掘調査を継続しつつ、真実性の高い庭園の修復を目指している。今後の課題は、発掘成果を踏まえながら奥州藤原三代の園池に対する思想・技法的な変遷を検証することであろう。

参考文献

- 菅野 1991、菅野成寛「平泉無量光院考」、『岩手史学研究』74号、1991年。
- 本中 1994、本中真『日本古代の庭園と景観』、吉川弘文館、1994年。
- 藤島 1995、藤島玄治郎『平泉建築文化研究』、吉川弘文館、1995年。
- 八重樫 2007、八重樫忠郎『特別史跡毛越寺境内 特別名勝 毛越寺庭園整備報告書』、岩手県平泉町文化財調査報告書第106集。
- 岩手県教育委員会 2013、『世界遺産 平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群』、岩手県教育委員会発行、2013年3月。
- 森 2015、森達也『中国青瓷の研究—編年と流通』、汲古書院、2015年。
- 島原 2018、島原弘征「平泉における苑池遺構」、『考古学ジャーナル』2018年11期。
- 櫻井 2018、櫻井友枝「柳之御所遺跡の変遷とその位置」、『考古学ジャーナル』2018年11期。
- 劉 2018、劉海宇「平泉考古学の現状と課題」、『考古学ジャーナル』2018年11期。
- 劉 2019、劉海宇「柳之御所跡出土の中国産白磁『吉』字耳破片の産地推定研究」、『貿易陶磁と東アジアの物流—平泉・博多・中国』、高志書院、2019年1月。

Hiraizumi as a world heritage and the present archaeological situation

LIU Haiyu and ANDERS Carlqvist

Introduction

“Hiraizumi – Temples, Gardens and Archaeological Sites Representing the Buddhist Pure Land” was appointed UNESCO World Heritage at the 35th UNESCO World Heritage Committee meeting in June 2011. The criteria fulfilled was (ii) “to exhibit an important interchange of human values, over a span of time or within a cultural area of the world, on developments in architecture or technology, monumental arts, town-planning or landscape design” and (iv) “to be an outstanding example of a type of building, architectural or technological ensemble or landscape which illustrates (a) significant stage(s) in human history” . Five sites at the property were appointed: Chūson-ji, Mōtsū-ji, Kanjizaiō-in Site, Muryōkō-in and Mount Kinkei. Initially six sites were nominated, but Yanagi no Gosho Site was unfortunately removed by ICOMOS (International Council on Monuments and Sites) since it was judged that it did not have any direct connection to gardens expressing the Buddhist Pure Land. At present, the Agency for Cultural Affairs and Iwate Prefecture are conducting excavations and other projects in order to add Yanagi no Gosho Site and other related sites to the world heritage. Below, the present archaeological situation related to this process aiming at expanding the world heritage is explained.

1. Chūson-ji

Chūson-ji, built in the former half of the 12th century by the first Ōshū Fujiwara lord, Kiyohira, is the oldest temple of the property. It is situated on Mount Kan in the northern part of central Hiraizumi. According to Azuma Kagami, Chūson-ji consisted of more than 40 halls, and over 300 monks were active here. At present the temple site includes Konjiki-dō (national treasure), Konjiki-dō fukudō (Important Cultural Property), Kyōzō (Important Cultural Property), Ōike Garan (Special Historic Site) and other buildings and parks with ponds possessing outstanding universal value.

Konjiki-dō is a square wooden building with sides 5.48 m long furnished with a single roof. Except for the roof, the four walls and supporting materials are all covered with gold foil, and the whole Amitābha hall symbolizes the Buddhist Pure Land. According to inscriptions on the ridge poles, the hall was erected in 1124. In the hall there are three platforms for Buddhist statues (shumi-dan) decorated with mother of pearl works and golden lacquer works (maki-e). Since coffins containing the bodies of three Fujiwara leaders, and the head of the forth, are placed in these platforms, the hall should be regarded a mausoleum. On each platform,

representing the Western Paradise, stand three Amitābha statues, two deva-statues and six Kōtigarbha statues. Konjiki-dō fukudō, a wooden hall built in 1288, is a protective building originally covering Konjiki-dō. The present one was probably rebuilt in the 15th century and has now been moved standing in the northwest part of the Chūson-ji enclosure.

Kyōzō, a two-storey wooden building erected in 1122, has sides 7.72 m long and was used to store sutras like the Kiyohara Sutra (a complete sutra written with golden and silver ink on purple-died paper) and a complete Song Sutra. On the inside, seven shelves for the sutras are placed along three of the walls (Iwate-ken Kyōiku Iinkai 2013).

Ōike Site is an oval-shaped pond situated in the northwestern part of the Chūson-ji enclosure. The pond was excavated in 1958 and 1959 by Hiraizumi Iseki Chōsa-kai, but from 1998 Hiraizumi Chō Kyōiku Iinkai is responsible for the excavations. Results obtained from the excavations indicate that the pond was both constructed and later rebuilt in the 12th century. At the time of the first leader, Kiyohira, the pond was made 120 m long from south to north and 70 m wide, indicating that this was the first garden at Hiraizumi that symbolized the Buddhist Pure Land. In the second half of the century, the pond was rebuilt now becoming 90 m long (from south to north), but still 70 m wide. (Fig. 1) However, it is remarkable that the remains disclosed at the excavations do not correspond to the contents of Chūson-ji kuyō ganmon (Shimabara 2018).



[Fig. 1 Assumed Position of Chūson-ji Ōike Garan (Illustration adopted from Fujishima 1995:68)]

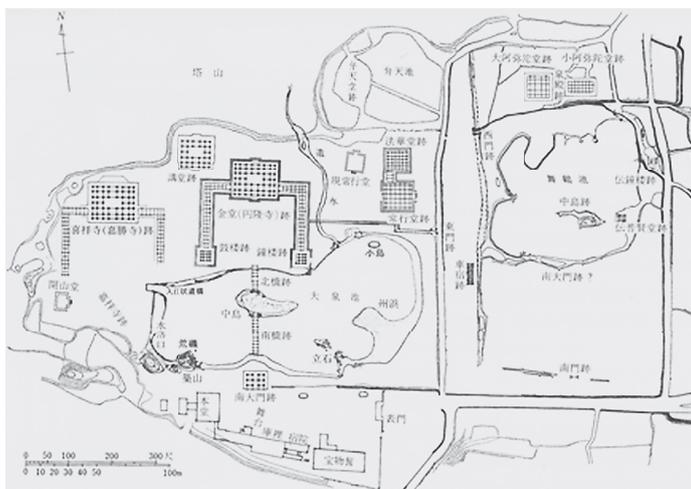
2. Mōtsu-ji

Mōtsu-ji which was built in the mid 12th century by the second Fujiwara Ōshū leader, Motohira, is situated in the southwestern part of central Hiraizumi. According to Azuma kagami, besides Enryū-ji (also built by Motohira) and Kashō-ji (built by the third Fujiwara Ōshū leader, Hidehira), both from the second half of the century, there were more than 40 Buddhist halls, and over 500 monks worked in the area. It is believed that Mōtsu-ji was constructed with Hosshō-ji, built by Emperor Shirakawa in Kyoto, as a model. At the present Mōtsu-ji, besides the temple complex of Enryū-ji and Kashō-ji, there is a garden with a pond

called Ōizumi ga Ike (Special Scenic Spot) and a meditation hall called Jōgyō-dō, the latter reconstructed in the 18th century.

Ōizumi ga Ike was excavated between 1980 and 1990. It could be established that the pond was 190 m long from east to west and 60 m wide, and that it was constructed using several different techniques including pebbled beach (suhama), juttied islands (dejima), standing stones (tateishi) and miniature hills (tsuki yama). The island Nakashima is situated on the axis between the southern gate and Enryū-ji. On one side of the island there is a curved bridge (sori hashi) with ten pillars, and a flat bridge with six pillars on the other. In general, the shores are covered with bead-shaped pebbles, but in the southeast there are juttied islands symbolizing a rocky coastline, and at the southwestern side miniature hills are made up by rough rocks, four meters high. At the southeastern side, a group of stones, 2.5 m high, are placed in the pond, and in the northeast there is a small island, 9 m long (east to west) and 4 m wide. In the pond, there is a total of three islands of varied size. In the northeast traces of an artificial river, 80 m long and 1.5 m wide flowing out into the pond, could also be verified. The main hall (hon-dō) at Enryū-ji is connected to the elevated buildings hosting the bell (shōrō) and the drum (korō) by galleries on both sides. The 冂-shaped buildings and the pond at the forth side is a typical Shinden-zukuri architectural layout often found in gardens. (Fig. 2) From above, Ōizumi ga Ike looks like a turtle. It is possible the constructors of the pond has followed the instructions in Sakuteiki: “A pond should be shaped like a turtle or a crane” . Also the pebbled beach, rocky coastline, and the river in the northeast are designs that resembles the instructions of Sakuteiki (Yaegashi 2007).

Due to the strong aftershocks of the Tōhoku earthquake the standing stones inclined with seven degrees and while their position was restored in 2011 and 2012 examinations were conducted. The foundations stones that were replenished at the restoration were marked with a cross using a grinder to enable future researchers to distinguish the new stones from the old ones (Shimabara 2018).



[Fig 2. Positions of Mōtsu-ji and Kanjizai Ōin Sites (Illustration from Fujishima 1995:117)]

3. Kanjizaiō-in

Kanjizaiō-in that is believed to have been built for the wife of Motohira, the second Fujiwara Ōshū leader, is separated from the western side of Mōtsu-ji by a 30 m wide road. According to the excavation-results, a large and a small Amitābha temple together with other buildings were situated on the northern shore of Maizuru ga Ike, a pond with an island 30 m long from east to west and 12 m wide. The pond itself is about as long as it is wide, approximately 100 m, and from above it looks like a crane, following the instructions of Sakuteiki. (Fig. 2) Compared to Ōizumi ga Ike at Mōtsu-ji, the design of Maizuru ga Ike is simple. Design elements like the rocky coastline and stone-groups at the bottom of the waterfall on the western side, and the jugged island of the pebbled beach follow Sakuteki in general.

Gaijirō Fujishima that found traces of houses on the axis between the large and the small Amitābha temple assumes these to be the Motohira residence (Fujishima 1995). Since the general layout with Amitābha temples on the northern side of the pond indicates that the garden is a Shinden-zukuri garden, this view ought to be correct. Makoto Motonaka affirms that the reason for the Amitābha temples not to be situated on the western side of the pond ought to be because they were built as a continuation of the garden at the residence (Motonaka 1994).

4. Muryōkō-in

With Mount Kinkei in the background, Muryōkō-in was built in the latter half of the 12th century by Hidehira, the third Fujiwara Ōshū leader. It is assumed the temple was built following the arrangement of Byōdō-in in Uji. Mount Kinkei rises in the west and Garan Gosho Site, that is assumed to be Hidehira's residence, stands to the east. According to the excavation-results, the pre-cincts (surrounded by earthworks to the west, north and east) are 320 m from south to north and 230 m from east to west. Bonji ga Ike is a large pond, 160 m long from east to west, 150 m wide, and 30 cm deep. In the pond, there are three islands of varied size. This Amitābha temple has symmetrical wings on both sides, and it is



[Fig. 3 Muryōkō-in Site (Illustration from Shimabara 2018)]

erected on the large western island. On the eastern island, foundation stones of three buildings thought to have been prayer halls and storage rooms have been excavated (Shimabara 2018, Fig. 3).

Furthermore, a small island connected by a bridge to the northern side of the eastern Island was confirmed. According to Seikan Sugano, in April or August, standing on the line connecting Mount Kinkei (600 meters away) and the main temple buildings erected on the islands, it appears like the sun sets on the summit

(Sugano 1991). This observation is an important piece of evidence to prove that Mount Kinkei forms part of the Buddhist Pure Land of Muryōkō-in.

5. Mount Kinkei

Rising 60 m from the ground, Mount Kinkei (98.6 m above sea level) is a small mountain in the western part of central Hiraizumi. Since it was used as the basepoint for the city planning of Hiraizumi, it is the most important mountain. A sutra mound (kyōzuka) was erected on the mountain-top, and in 1930 a bronze container for sutras (kyōzutsu), a porcelain jar (tsubo) and other items were excavated from the mound. South of Mount Kinkei, Mōtsu-ji and Kanjizaiō-in are situated, and to the east is the garden of Muryōkō-in and Yanagi no Gosho Site.

Lately it has been understood that handwritten sutras were buried in what was considered favorable ground on mountainsides or hilltops and memorial services were held for them all over the Japanese archipelago, from Kyūshū to Hokkaidō. The sutra mound erected in the 12th century on Mount Kinkei forms part of this Buddhist Pure Land faith based on Mappō (degenerated time) philosophy. This said, to clarify the circumstances of the sutra mound on Mount Kinkei, further archaeological investigations are needed.

6. Yanagi no Gosho

Excavations of Yanagi no Gosho Site, situated on the terrace of the western banks of the Kitakami River, were initiated in 1988 and are continuing to this date. Archaeological investigation has revealed a large double moat and remains of governmental buildings. These have been rebuilt several times and they feature eaves on four sides. Remains of several other buildings and of a garden with pond have also been confirmed. (The pond has been rebuilt once). Various items featuring script, including unglazed earthenware, stands for tableware (oshiki) and Chinese made ceramics, have also been found together with numerous other artifacts contributing greatly to our knowledge about Hiraizumi. (Fig. 4) Considering the character and the number of the remains and artifacts unearthed, the area inside the moat ought to correspond to what in Azuma kagami is called Hiraizumi no Tachi (Sakurai 2018).

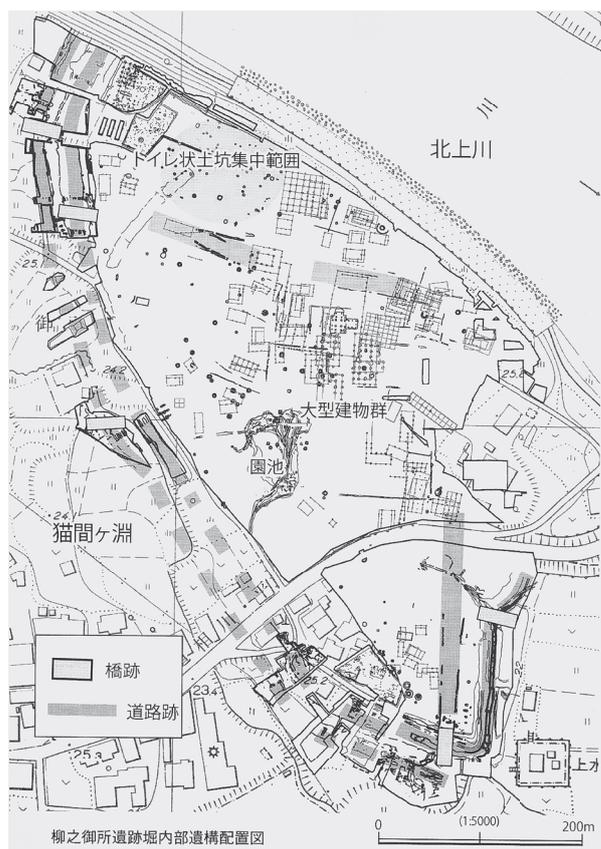
Excavations show that the area inside the moat was used for administrative purposes, and that it was in use during the hundred years the Ōshū Fujiwara regime lasted. It is above all the artifacts featuring script and pictures that confirm this assumption. It is assumed that script written with ink on objects such as stands for tableware, rollers for scrolls (daisenjiku) and administrative copper-stamps – together with pictures of frogs with human traits drawn on the remains of stands for tableware – demonstrate that this was a place for both administrative activities and banquets. Considering the age of the pottery, such as unglazed earthenware, it is clear that the occupation of the site can be divided in three periods, the former, middle, and latter parts of the 12th century. However, to establish the distribution of buildings and other structures during the respective periods would need further investigation.

Much Chinese-made ceramics have been unearthed at the various sites in Hiraizumi, but among these the largest amount, over 60 % , comes from Yanagi no Gosho Site. The

distribution of Chinese-made ceramics at Hiraizumo started in the former half of the 12th century, and was widely spread in the latter half of the century, during the reign of the third and fourth Ōshū Fujiwara lords, Hidehira and Yasuhira. The Chinese character ‘吉’ found on the shred of a handle excavated at Yanagi no Gosho Site shows great resemblance to how that character appears on numerous jars and jugs of Dehua porcelain produced at the Huanxi Kiln in Fuzhou (China), making it highly probable that the object was produced there (Liu 2019). Several routes for the distribution of this ware has been suggested, for example that it

was first gathered at Fuzhou and sent to Hakata via Ningbo where a shiboshi (governmental office taking care of oversea trade) was situated. Another route could have been from Fuzhou via Taiwan and Ryūkyū before arriving at Hakata. From Hakata the ware was transported to Hiraizumi (Mori 2015).

Among the different containers excavated at Yanagi no Gosho Site, Dehua porcelain is well represented, and among these, an expensive-looking jar with four handles has been interpreted to function as a symbol of authority. However, since this receptacle has traces of black lacquer on the neck and bottom (indicating that it has been sealed), the possibility that it was used for storage cannot be denied (Liu 2018).



[Fig. 4 Yanagi no Gosho Site (Illustration from Sakurai 2018)]

Final remarks

Above, a summary of the sites at Hiraizumi world heritage and of Yanagi no Gosho Site, as well as the results of archaeological examinations have been given. In Hiraizumi exists a large number of gardens with ponds. Among these, Ōike at Chūson-ji, Ōizumi ga Ike at Mōtsuji, Maizuru ga Ike at Kanjizaiō-in, and Bonji ga Ike at Muryōkō-in are representative. At present, based on ideas and techniques of archaeological restoration, Ōizumi ga Ike at Mōtsuji and Maizuru ga Ike at Kanjizaiō-in have been restored. While archaeological investigation continues at Ōike at Chūson-ji and at Muryōkō-in Site, it is expected that faithful restorations can be made here. From these efforts it will hopefully be possible to deeper explore the transition of the philosophy and techniques connected to these gardens during the time of the three Ōshū Fujiwara lords.

References

Fujishima 1995

Gaijirō Fujishima. *Hiraizumi kenchiku bunka kenkyū*. Yoshikawa Kōbunkan.

Iwate-ken Kyōiku Iinkai 2013

Iwate-ken Kyōiku Iinkai. *Sekai isan Hiraizumi: bukkokudo (jōdo) wo shimesu kenchiku, teien oyobi kōkogakuteki isekigun*.

Iwate-ken Kyōiku Iinkai.

Liu Haiyu 2019

Hiayu Liu. “Yanagi no Gosho iseki shutsudo no Chūgoku-san no hakuji ‘吉’ ji mimihahen no sanchi sui-ji kenkyū” . Yabu Toshihiro, Mori Tatsuya and Tkudome Diasuke (eds.) *Bōeki tōji to Higashi Ajia no butsurū: Hiraizumi, Hakata, Chūgoku*. Kōshi Shoin.

Liu Haiyu 2018

Hiayu Liu. “Hiraizumi Kōkogaku no genjō to kadai” . *Kōkogaku Journal* 11.

Mori 2015

Tatsuya Mori. *Chugoku seiji no kenkyū: hennen to ryūtsū*. Kyūko Shoin.

Motonaka 1994

Makoto Motonaka. *Nihon kodai no teien to keikan*. Yoshikawa Kōbunkan.

Sakurai 2018

Tomoazusa Sakurai. “Yanagi no Gosho iseki no hensen to sono ichi” . *Kōkogaku Journal* 11.

Shimbara 2018

Masahiro Shimbara. “Hiraizumi ni okeru enchi ikō” . *Kōkogaku Journal* 11.

Sugano 1991

Seikan Sugano. “Hiraizumi Muryōkō-in kō” . *Iwate shigaku kenkyū* 74.

Yaegashi 2007

Tadao Yaegashi. *Tokubetsu shiseki Mootsuji keidai. Tokubetsu Meishō: Mōtsu-ji teien seibi hōkokusho*. (Iwateken Hiraizumi-chō Bunkazai Chōsa Hōkokuho 106.)